「義務だから」なんてもったいない！
オープンアクセスで世界を幸せにしよう

～国のオープンアクセス基本方針をきっかけに
改めてインターネット時代における大学図書館の役割を考える～

55 Slides

京都大学附属図書館　研究支援課長
野中雄司

2025年度　大学業務ソリューションセミナー
～他大学の先進的な取組を共有し大学の未来を拓く～
2025(令和7)年12月11日（木）
@早稲田大学アカデミックソリューション　大隈スクエアビル

自己紹介

北海道大学
附属図書館
13年
係員10年
係長3年

室蘭工業大学
附属図書館
3年
係長3年

東京大学
附属図書館
4年
係長4年

富山大学
附属図書館
3年
課長3年

京都大学
附属図書館
2年目
課長2年目

自己紹介（機関リポジトリとの関わり）

北海道大学
附属図書館
13年
係員10年
係長3年

係員時代に
リポジトリ担当3年

室蘭工業大学
附属図書館
3年
係長3年

東京大学
附属図書館
4年
係長4年

富山大学
附属図書館
3年
課長3年

京都大学
附属図書館
2年目
課長2年目

現在
リポジトリ担当課長
として2年目

HUSCAP～KURENAI までブランク？約13年…
この間はサービス部門担当が多く、いわゆる一般的？な図書館職員です

本日のお話しの概要（＋αでご依頼いただいたもの）

【本日のお話しの概要（本セミナーウェブサイトより）】

国のOA基本方針が定められました。この方針を一つの切り口として、改めてインターネット時代における大学図書館の役割を考えます。
「機関リポジトリの本来的な意義とは何なのか？」「なぜ大学図書館がオープンアクセスに関わるのか？」などについて、京都大学での事例も交えつつ共に考え、さらにそこから私たち大学図書館にできることは何なのかを共に考えます。

【+αの主催者様からのご依頼内容】

機関リポジトリでの登録・公開について、「何から手をつければよいか」と課題を感じている大学職員の方が多いかと存じます。つきましては、研究者を支えるお立場でのご経験に基づき、「具体的にどう進めればよいか」をお話しいただけますでしょうか。また、この中で JPCOAR にて実施されているコミュニティ醸成活動についても情報提供いただけますと幸いです。

本日のシナリオ

1. 機関リポジトリの意義と大学図書館の役割
2. 京都大学では何をしているの？
3. コミュニティで力をあわせて！
   JPCOARコミュニティの紹介と機関リポジトリのやること整理
4. まとめ

1

機関リポジトリの意義と大学図書館の役割

話者私見です

改めてオープンアクセスの意義とは？

義務化はされたけど、国のOA基本方針の目的も

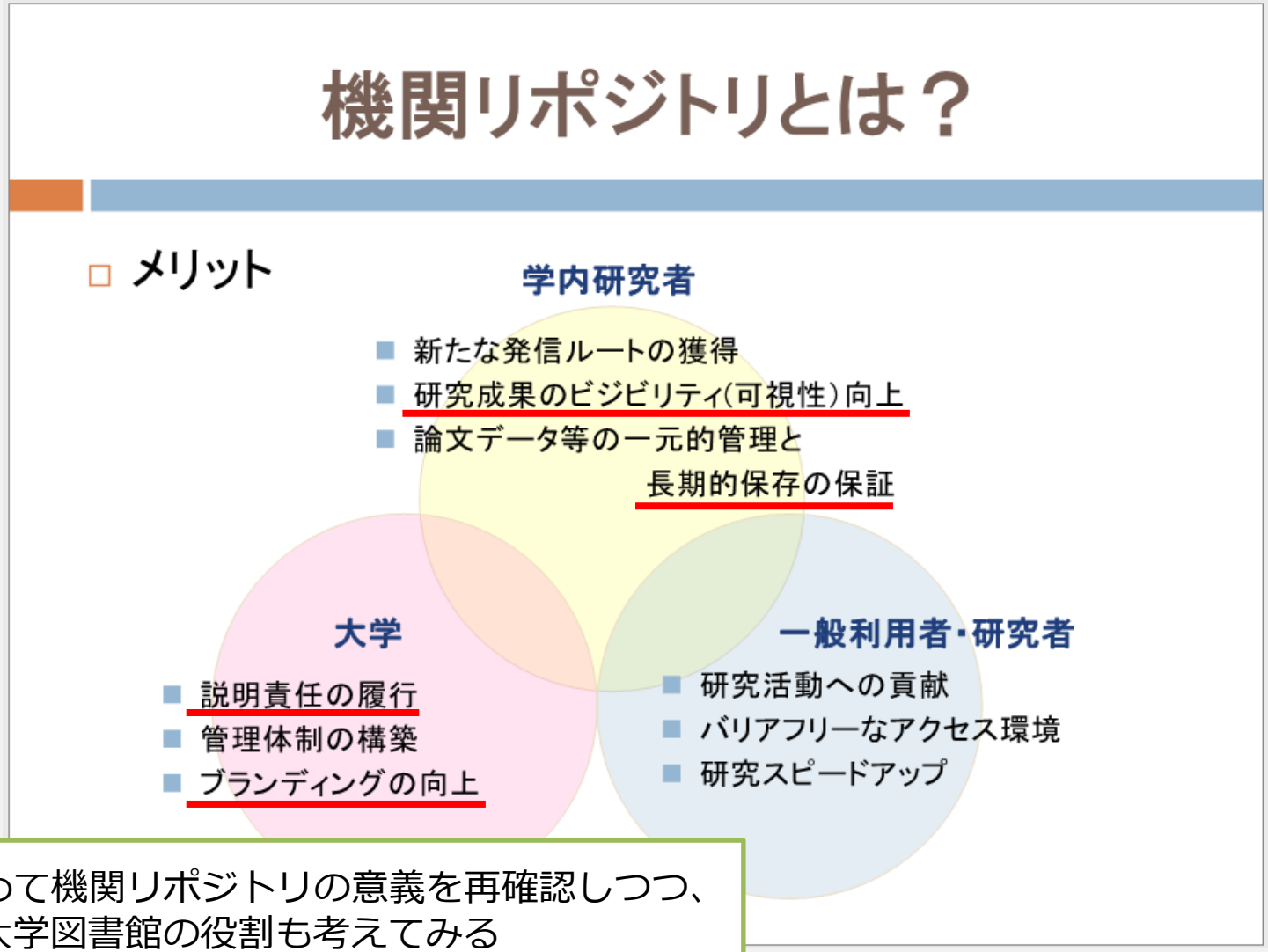
「公的資金によって生み出された研究成果を広く国民に還元するとともに、その共有・公開を通じて自由な利活用を図り、科学技術、イノベーションの創出及び地球規模課題の解決に貢献すること。」

誰もが反対のしようがない理念、目的であり「義務だから」ではもったいない！

大学図書館にとっても貢献度を高められるチャンス！

改めて機関リポジトリの意義とは？

機関リポジトリの意義（基本）



赤線（話者追加）

「義務化」にあたり、改めて機関リポジトリの意義を再確認しつつ、機関リポジトリにおける大学図書館の役割も考えてみる

「機関リポジトリ概論（平成２２年度学術ポータル担当者研修）」より

大学図書館関係の最新政策文書でも

オープンサイエンス時代における大学図書館の在り方について(審議のまとめ)

（文部科学省科学技術・学術審議会情報委員会オープンサイエンス時代における大学図書館の在り方検討部会(令和5年1月25日)）

１丁目１番地に以下の記述

（１）今後の大学図書館に求められる教育・研究支援機能や新たなサービスについて

【ポイント】
大学図書館は、今後の教育・研究における利用に適した形式で既存のコンテンツのデジタル化と、**学術研究等の成果として今後産み出されるコンテンツのオープン化**を進める。（以下略）

大学図書館関係の最新政策文書でも

さらに「**大学図書館の本質的認識**」として

大学図書館は、情報やデータ、知識が記録されることを前提として、
大学における教育・研究の文脈においてそれらの発見可能性を高め、
アクセスを保証し、また利活用できるようにすることで
継続的に**知が再生産されるようなシステム**を維持するために存在する
との本質的認識に立っていた

と記載されている。

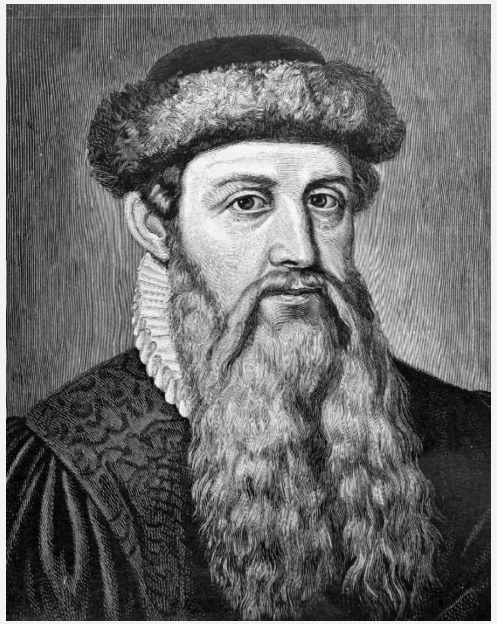
なぜ「コンテンツのオープン化」をすすめるのか、を考えるにあたって、
改めて「知が再生産されるようなシステム」を振り返ってみる

「知の再生産システム」の現状認識
（「コンテンツのオープン化」の意義を考えるために）

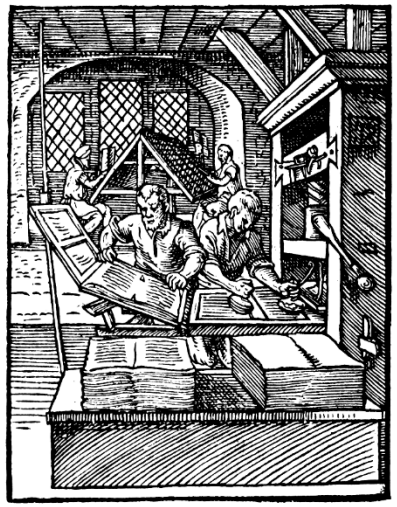
約500年前～20世紀末（グーテンベルク革命～デジタル革命前夜）

第一の情報爆発
＜生産→流通→消費＞の時代
文字やイメージの大量複製と流通、その消費のシステム

- 大量複製型のメディア文化がより多くの大衆を巻き込んでいくことで発展するという時代
- マスメディアの活躍（話者追加：旧来の学術出版者も？）
- その時代は終焉しつつあり、オールドメディアの最盛期は過ぎた



グーテンベルク



吉見俊哉. (2013). デジタル時代における知識循環型社会の価値創造基盤. 情報管理, 56(8), 491–497.
https://doi.org/10.1241/johokanri.56.491　より

「知の再生産システム」の現状認識
（「コンテンツのオープン化」の意義を考えるために）

20世紀末～現在（デジタル革命）

第二の情報爆発

- **インターネットの発達によりネット社会が出現。すべての人が発信者になれるようになった。**
- **コンテンツが大量複製されて一斉に伝播・流通し、消費されていくというマス・コミュニケーションの回路総体を変えていく。**

デジタル革命による地球規模の情報爆発

- 情報廃棄物が日々蓄積
- 適切に保存し、再利用していく循環型システムが必要

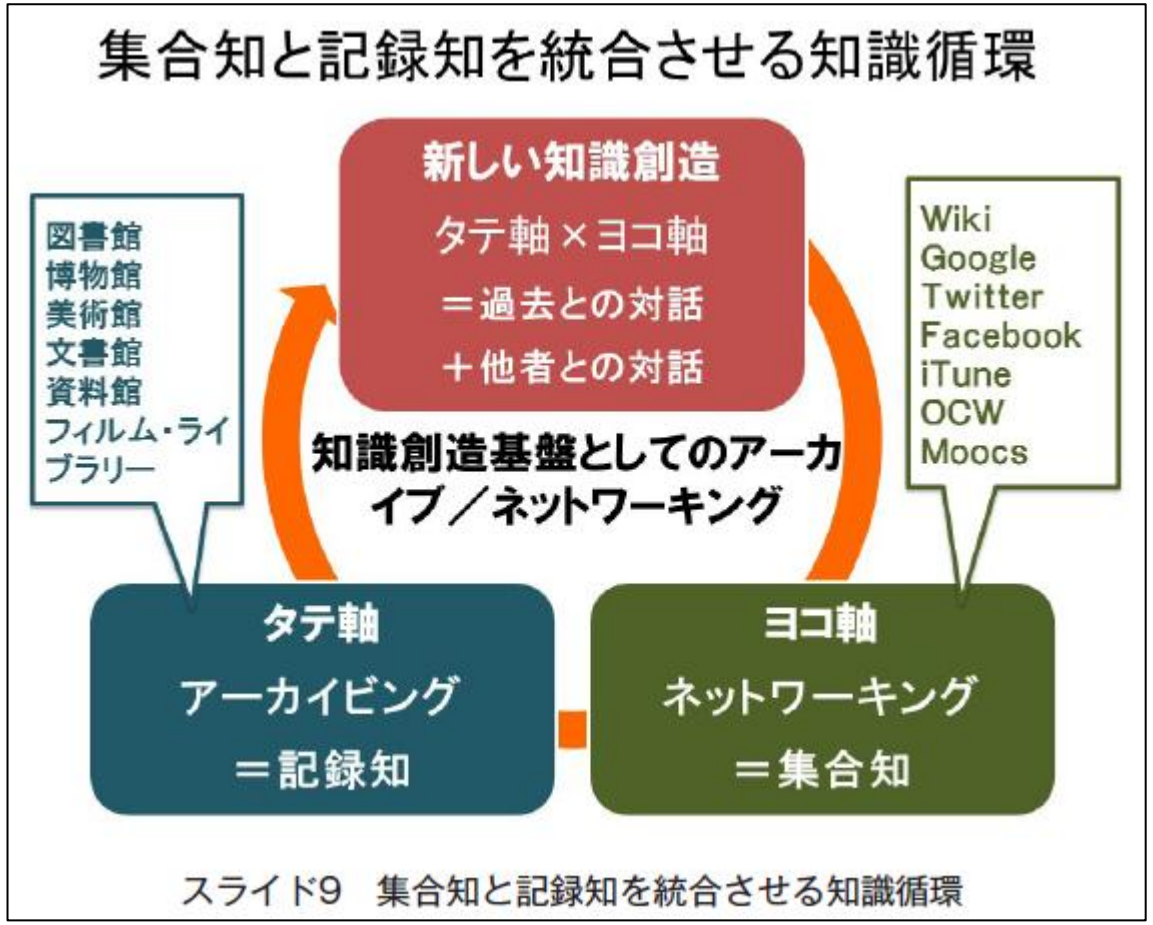
＜蓄積→検索→再利用＞への転換

知識のリサイクル型の再生産プロセスが、これまでの消費型のプロセスを補完しつつ、影響を拡大させていく

吉見俊哉. (2013). デジタル時代における知識循環型社会の価値創造基盤. 情報管理, 56(8), 491–497. https://doi.org/10.1241/johokanri.56.491 より

「知の再生産システム」の現状認識
（「コンテンツのオープン化」の意義を考えるために）

「新しい知識創造」



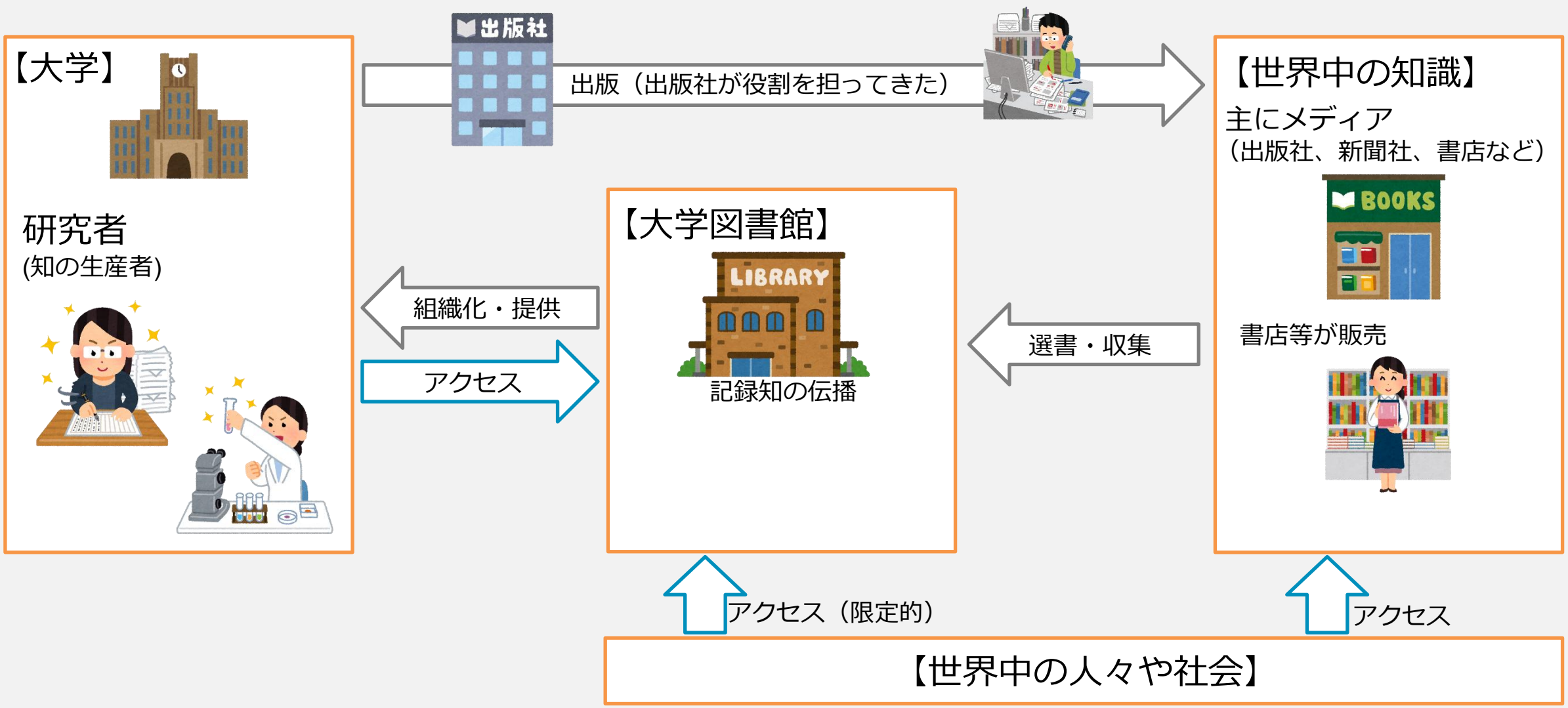
- フローでぐるぐる回っている情報は、流れていくだけで深まらない
- 巨人の肩にのり、過去を循環させる仕組みの内挿を

- 新しい知識創造
  - アーカイビング＝記録知
  - ネットワーキング＝集合知

両者が組み合わされることで初めて新しい知が生み出される

吉見俊哉. (2017). なぜ、デジタルアーカイブなのか? —知識循環型社会の歴史意識. デジタルアーカイブ学会誌, 1(1), 11–20. https://doi.org/10.24506/jsda.1.1_11 より

「知の再生産システム」の中での大学図書館（過去：デジタル革命前）

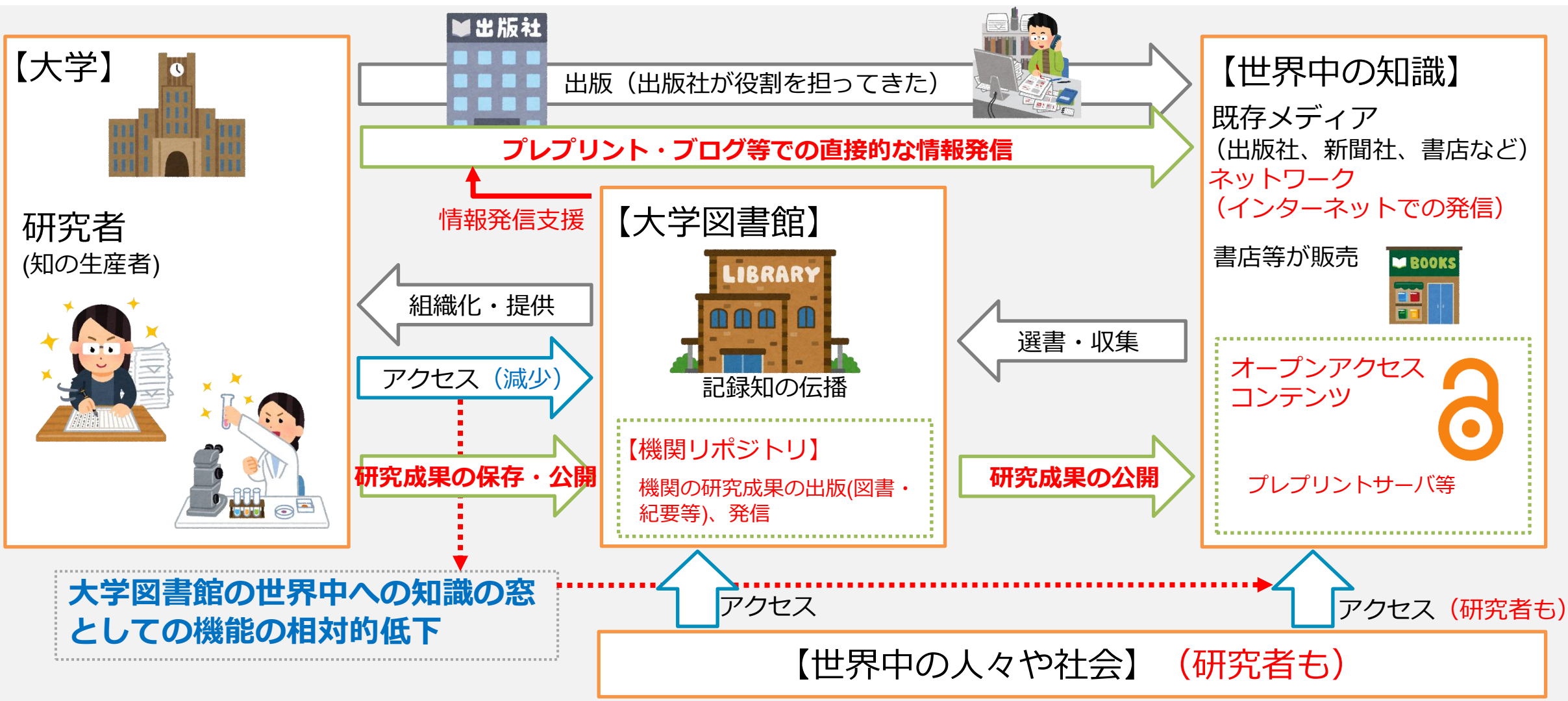


大学図書館は、主に大学構成員への世界中への知識の窓として機能してきた

「知の再生産システム」の中での大学図書館（過去：デジタル革命前）

大学図書館は、主に大学構成員への世界中への知識の窓として機能してきた

「知の再生産システム」の中での大学図書館（現在：デジタル革命後）



大学図書館は、世界中への知識発信の窓としても機能する

デジタル（ハイブリッド）・ライブラリー　△電子と紙のハイブリッド　**○知識の伝播と発信のハイブリッド**

「知の再生産システム」の中での大学図書館（現在：デジタル革命後）

大学図書館は、世界中への知識発信の窓としても機能する

デジタル（ハイブリッド）　・ライブラリー　△電子と紙のハイブリッド　**○知識の伝播と発信のハイブリッド**

機関リポジトリの意義と可能性

大学図書館は
「知が再生産されるようなシステムを維持するために存在する」

△　**オープン化による図書館の中抜き（役割の相対的低下）**
○　**「世界中への知識発信の窓」として無限大な貢献可能性**

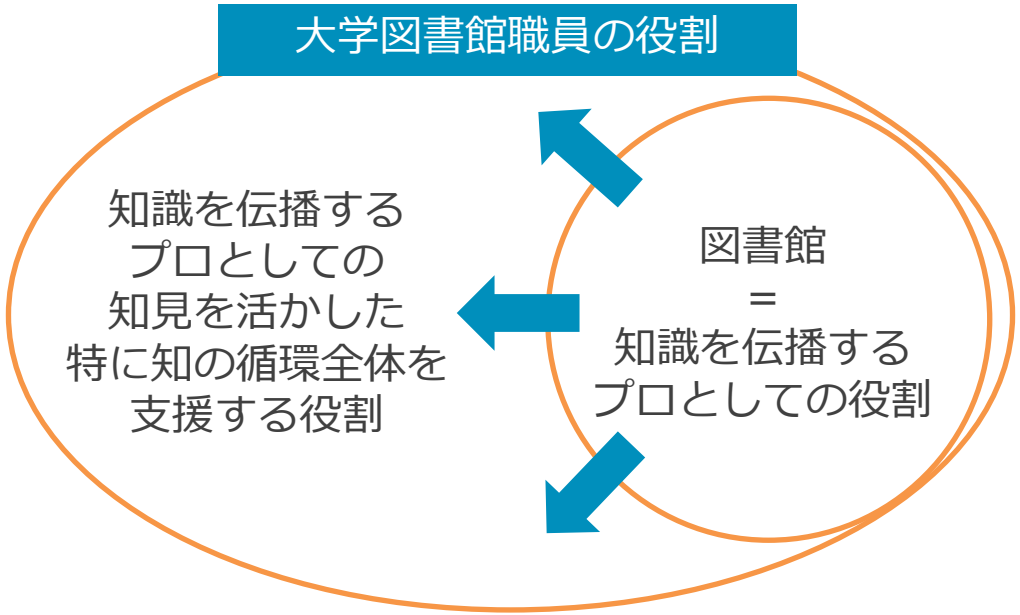
昔も今も図書館は「知の再生産システム」において重要な役割
（知りたい人に、知りたい知識を届ける。その役割はむしろ増大している）

デジタル化とオープン化が加速度的にすすんでいる今、
我々がさらに貢献する可能性が増大している。

機関リポジトリは世界中への知識発信の窓として
「知の再生産システム」の重要な役割を担い、科学の発展に貢献

個人的まとめ（2年前）

科学を発展させるための
大学の様々な取り組み



特にRead（知の共有）だけでなく、Publish（知の創造）にも支援し、知識の循環全体に貢献する。
オープンサイエンスの時代（知は書き手から受け手に直接的に伝播される）にはこれまでの知見を活かし知の創造の支援をも行っていくことが必要なのではないか。

知識の循環を支援するプロとして、知識を伝播するプロをベースとしつつ、
もっと広い範囲で大学や科学の発展に貢献する。

話者「大学図書館をDXする（2023 第109回 全国図書館大会 岩手大会）」より

図書館の「知の循環システム」への貢献

（これまで（も））知識を伝播する役割

私たちは世界中で協力して、１件１件目録を作成し、さらに利用者が使いやすいように棚に並べて、知りたい人が知りたいことにアクセスできるような環境を構築する仕事をしてきた。

（これから（も））知の循環全体を支援する役割

これからも同じで、オープンにしたい人がいたら、１件１件オープン化や研究成果発信の支援を行い、整理、流通させ、世界中の知りたい人が知りたいことにアクセスできるようにしていくことができる。
これは**私たちの最も得意**とすることであり、かつ**私たちにしかできないこと**ではないでしょうか。

私たち（図書館職員）ができること、役割

① １件１件コツコツとオープンにする

私たちのできる範囲で、できる量をコツコツとオープンにしていくこと。
（特に世界中で私たちにしかオープンにできない、紀要や学位論文、そしていわゆるグリーンオープンアクセス学術雑誌論文）

② 流通にのせ世界中の人に届ける

加えて、オープンにした成果物を、きちんと世界中の人に届けるようにすること。
（メタデータ（書誌情報など）を整え、世界中の人がみつけやすいようにCiNiiで検索できるようにすることや、GoogleScholar等の交際的なデータベースで検索できるようにすること）

2

京都大学では何をしているの？

新しい知識創造のための「知識の循環」に向けて

① １件１件コツコツとオープンにする
② 流通にのせ世界中の人に届ける

- やることはシンプルだけど、「知識の循環」を意識していきたい。
- 科学は、巨人の肩にのりながら、スパイラル上に知識が循環しながら発展していく。
- そのためには、研究成果である論文やその根拠データがオープンであることは大事なこと
- 「知識の循環」へ貢献するためには、**研究のライフサイクル全体を把握しながら、適切な支援**を行っていきたい。

大学における研究のライフサイクル

それぞれのフェーズにおいて、大学でも様々な支援を行ってきた

ただし…

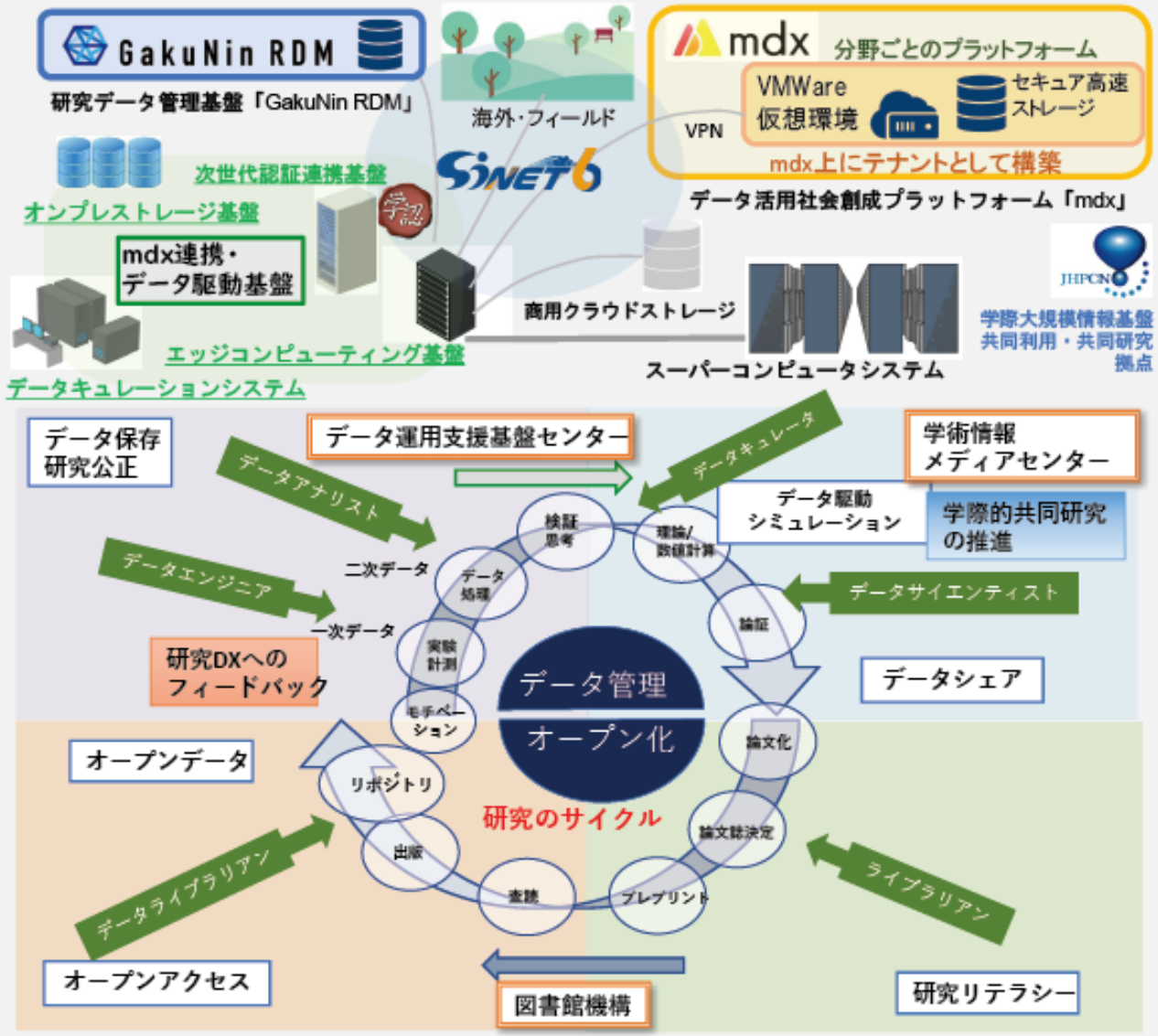
科学技術・学術審議会情報委員会　オープンサイエンス時代における大学図書館の在り方検討部会（第6回）令和4年11月14日
【資料1】研究のライフサイクルと研究データマネージメント（引原隆士　京都大学・理事（情報基盤，図書館担当））

組織支援における、現状の問題認識

多くの大学では研究サイクルの支援及び事務処理が別の部署や研究科等で連携なく個別になされ、それに慣れた研究者がその求めの必要性を自らの業務として不要なものと考える危険性がある。研究公正などの確認は研究のサイクルの中で行われれば苦もない話であるが、別の部署がその業務として研究の流れと関係なくエビデンスを求めてくることは、研究者からしてみれば煩わしいだけである。それと同様に、流れを知らずに公開を義務化する要請を大学が研究者に出すことは同様に想像できる。これは、大学という本来研究者を守るべき組織の中で生じる業務の局所最適化の弊害で、本来の研究組織の在り方も含めて設計する必要がある。

引原隆士. (2024). 研究データのオープンアクセスを担保する機関リポジトリの展開. STI Horizon, 10(2). より

「データ運用支援基盤センター」の設置



京都大学情報環境機構
データ運用支援基盤センター
（2024年1月設置）

局所でバラバラな支援ではなく、研究のライフサイクル全体に伴走した支援を行う
↓
センター内に「RDMコンサルタントグループ」を設置

引原隆士. (2024). 研究データのオープンアクセスを担保する機関リポジトリの展開. STI Horizon, 10(2). より

RDMコンサルタントグループ

データ運用支援基盤センターに設置された、研究チーム毎への研究のライフサイクル全体に伴走した支援グループ

KURENAI

知財担当部署

研推担当部署

研究チームA

・2025年申請の科研費に応募するため、データマネジメントプランを策定したい。
・論文にした研究データを機関リポジトリ（KURENAI）に掲載したい。

研究チームB

・MDXと連携したデータ駆動型研究をはじめたい。
・国際共同研究をはじめたいので、データ管理方法を検討したい。

研究チームC

研究室の研究データが溜まってきた、学外異動者の研究データはどのようなストレージで管理したらいいのかアドバイスがほしい。

RDMコンサルタントグループ

＜協働＞
データマネジメントプラン策定
データポリシー決定
データ管理システム選定・設定・ストレージ提供
メタデータ形式決定
関連論文のOA化・リンキング支援

＜課題発見・解決＞

ノウハウ蓄積＝スキル獲得

＜アサイン＞

図書館機構

公開するデータ

データライブラリアン
ライブラリアン
データ公開支援

＜アサイン＞

情報環境機構

キュレーションシステム開発・運用
データアナリスト
データサイエンティスト
システム基盤支援

＜アサイン＞

学術研究展開センター（KURA）

URA
研究支援

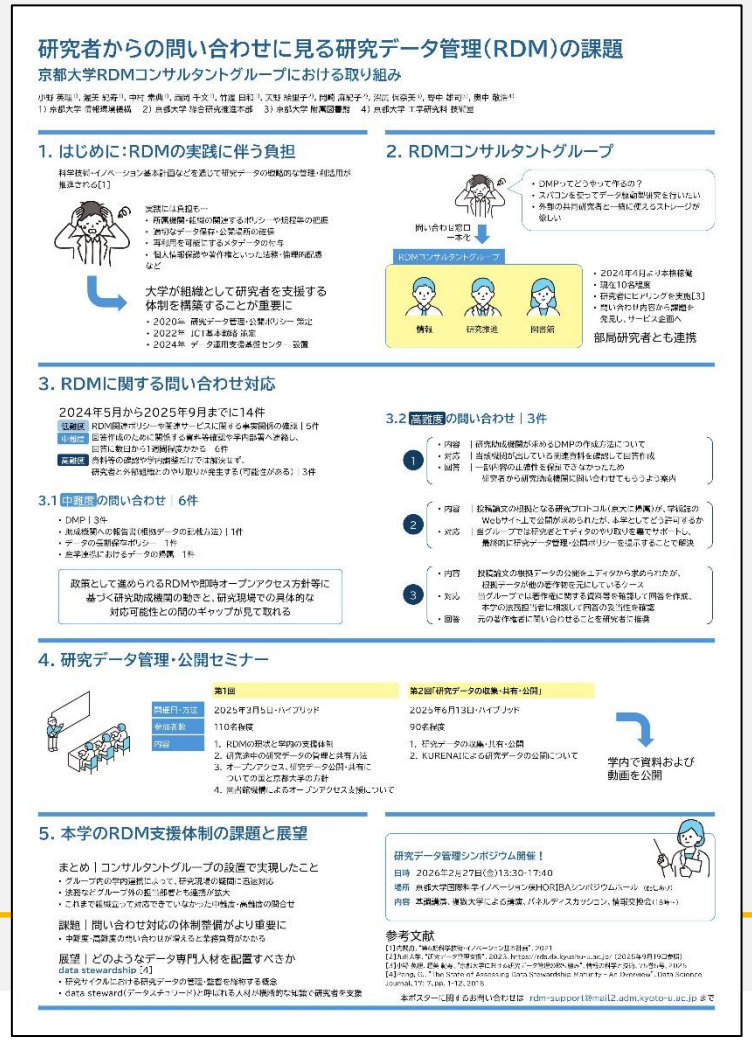
＜兼務＞

部局

若手研究者
研究現場との懸け橋

RDMコンサルタントグループと図書館機構

研究チーム毎への研究のライフサイクル全体に伴走した支援グループ



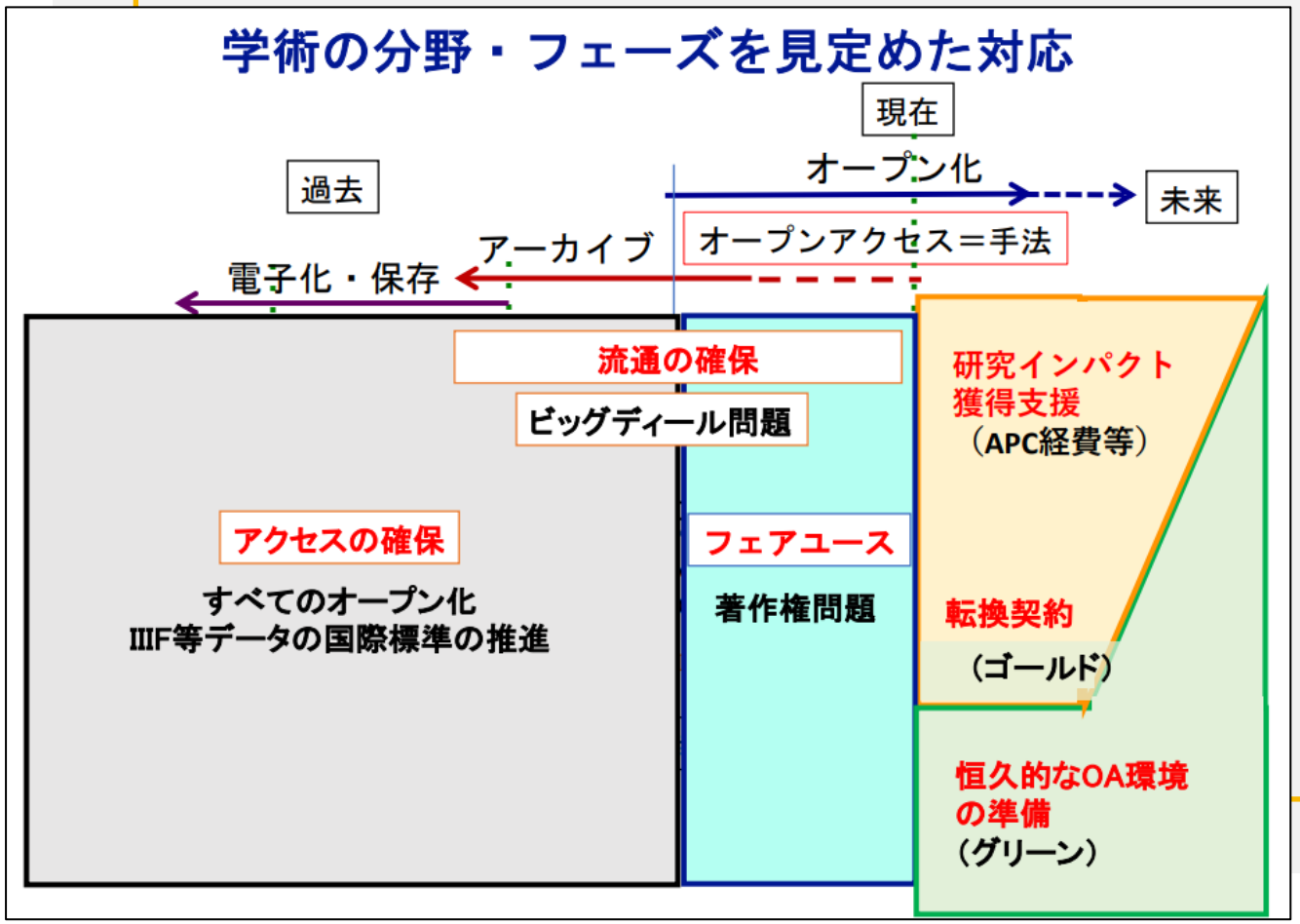
- 局所ごとの支援だけではなく、研究の計画から、成果公開まで
- 図書館機構でも、直接的には研究成果の「公開」への支援を行うが、研究の計画当初から、公開を見据えたアドバイスや案内、支援を行っていきたい。

（例えば、アンケートを実施する計画などの場合は、最終的にその成果論文やデータの公開を見据えた計画（DMPだけではなく）が必要であるし、おそらくスムーズであろう。）

大学ICT推進協議会2025年度 年次大会　一般発表(ポスター発表)　1PM3P-23「研究者からの問い合わせに見る研究データ管理（RDM）の課題：京都大学RDMコンサルタントグループにおける取り組み」小野ほか

図書館機構の事例や構想

「① １件１件コツコツとオープンにする 」「② 流通にのせ世界中の人に届ける」を基本とした京都大学図書館機構での取り組み事例や構想



主に以下２サービスで展開中

京都大学学術情報リポジトリ
（オープン化のプラットフォーム）

京都大学学術情報リポジトリ KURENAI 紅 Kyoto University Research Information Repository

京都大学貴重資料アーカイブ
（アーカイブのプラットフォーム）

京都大学貴重資料 Digital Archive

←引原隆士. (2024). 研究データのオープンアクセスを担保する機関リポジトリの展開. STI Horizon, 10(2). より

「１件１件コツコツとオープンにする」
①オープンアクセスや研究データ管理・公開のポリシー

京都大学オープンアクセス方針（2015年）

【抜粋】
2． 京都大学は、出版社、学会、学内部局等が発行した学術雑誌（図書等を除く）に掲載された教員の研究成果（以下「研究成果」という。）を、京都大学学術情報リポジトリ（以下「リポジトリ」という。）によって公開する。

京都大学研究データ管理・公開ポリシー（2020年）

【抜粋】
4 . 京都大学は、研究データが、論文などと同様に、今後の学術や社会の発展に貢献する知の基盤の一つであるとの認識に基づき、特段の定めがある場合を除き、可能な限り社会に公開し、その利活用を促進する。
5 . 京都大学は、研究データ管理および公開を支援する環境を整える責務がある。

- 研究インパクト獲得支援（APC経費等）や転換契約によるオープン化については、「恒久的なOA環境の準備」（京都大学オープンアクセス方針≒国のOA基本方針）を主方針としつつ、大学と研究者双方にメリットがある場合のみ、一部の転換契約を導入（ゴールドOAかグリーンOAかは研究者の自由な選択による）

「１件１件コツコツとオープンにする」
②KURENAIによるオープン化

- KURENAIによるオープン化（主なコンテンツ）
  - 学術雑誌論文：46,373件(2025年度：2,207件)
  - 紀要論文：129,259件(2025年度：1,133件)
  - 学位論文：31,709件 (2025年度：649件)
  - 研究データ：338件 (2025年度：26件)
- オープン化作業における、学内図書館・室（40程度）の職員協働体制の構築を開始

【オープンサイエンス推進連絡会】
図書館機構将来構想「基本目標１オープンアクセスを推進し、研究活動を支援する」を実現するため、全学図書館機能を担う附属図書館及び桂図書館、専門図書館である部局図書館室等とでより綿密な協働を行い、オープンサイエンスを推進する活動を行う。

- 「京都大学図書館機構将来構想2020-2027」では１丁目１番地にオープンアクセス推進

【図書館機構の基本目標】
基本目標１
オープンアクセスを推進し、研究活動を支援する

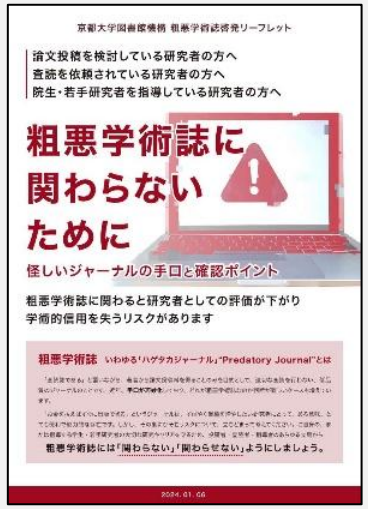
「１件１件コツコツとオープンにする」
②KURENAIによるオープン化

京都大学学術情報リポジトリ KURENAI 紅 Kyoto University Research Information Repository

【学内研究者への広報】

- オープンサイエンス啓発ショート動画シリーズ作成

- 各種パンフレットの作成



【出版支援】

- 粗悪学術誌についての問い合せ・情報提供

「京都大学におけるオープンアクセス支援」ページより

「１件１件コツコツとオープンにする」
②KURENAIによるオープン化

京都大学学術情報リポジトリ KURENAI 紅 Kyoto University Research Information Repository

【KURENAIのアピール】

- 各種特設サイトなども

【学内研究者によるオープン化の負担軽減】

- 「KURENAI公開支援システム」の運用

KURENAI 公開支援システム

↑「KURENAI公開支援システム」使い方動画なども作成

「京都大学におけるオープンアクセス支援」ページより

「１件１件コツコツとオープンにする」
③貴重資料デジタルアーカイブによるアーカイブ

- 貴重資料デジタルアーカイブによるアーカイブ公開
  - 図書館・室所蔵の古典籍を中心としたアーカイブと公開
  - 25,905 タイトル
  - 2,155,567 画像
- 国宝・重要文化財等含む
- 図書館・室所蔵のコレクションだけではなく、学内の様々な学部、研究科、研究所等で所蔵しているデジタルコレクションのポータルサイト、公開場所となることも検討中
- くずし字へのOCR処理による本文テキストデータ提供も開始予定

「１件１件コツコツとオープンにする」
③学術書のオープン化

- 2007年度から、京都大学学術出版会と連携し、京都大学学術出版会から刊行している研究所をデジタル化、KURENAIで公開（京都大学学術出版会が発行する研究書の中から著者及び出版会の意向と協議の上決定）

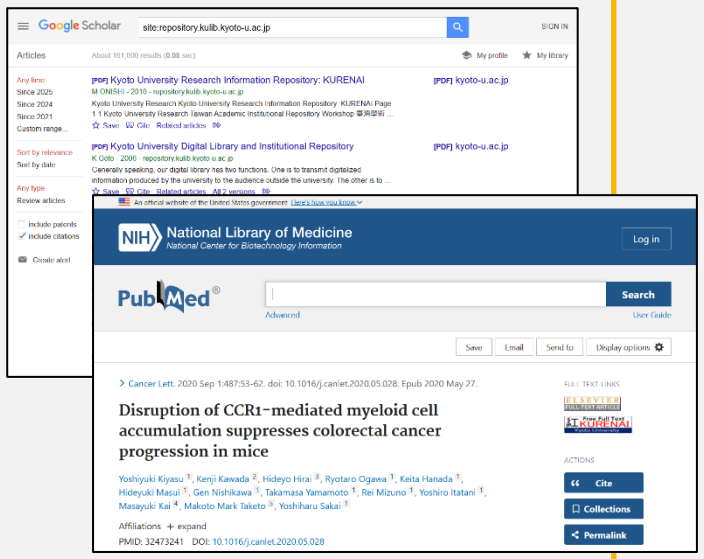
- さらに、新たな研究者の成果公開支援の試みとして、図書館によるオープンアクセス出版を検討している。特に商業ベースになりにくい学術書の出版、公開支援が行えないかの検討を開始している。

「流通にのせ世界中の人に届ける」
①KURENAIコンテンツを多様なデータベースに採録してもらう

京都大学学術情報リポジトリ KURENAI 紅 Kyoto University Research Information Repository

- IRDBだけでなく、多様なデータベースから採録されるよう積極的に
- IRDB担当が頑張ってくれており、CiNii等多様なデータベースにデータを提供ないし、採録される仕組みを構築してくれているが、全体最適化による限界もある。
- 京大では現在IRDB以外でも、Google Scholar, PubMed, OpenAlex(Unpaywall含む)などを重要視して採録されるよう頑張っている

- Google Scholar
  - リポジトリからSitemapを出力し、採録の対象にしてもらう
  - KURENAI：現在約160,000件採録
- PubMed
  - PubMedに連絡、登録し、必要なデータを送付する
  - 「LinkOut」機能からリポジトリにアクセスできるようになる
  - KURENAI：現在約12,000件採録
- OpenAlex
  - Unpaywallの登録フォームから必要な情報を登録する。
  - KURENAI：現在約70,000件採録



話者「一介の機関リポジトリ担当者が考えるOpenAlex & Unpaywall への期待と貢献可能性:私たちができるオープンアクセスへの貢献とは」
ScholAgora第10回セミナー ワークショップ「OpenAlexを使う」令和7年9月9日(火)　で詳しく京大の取り組みを紹介しています。

「流通にのせ世界中の人に届ける」
②その他

- 学内発行学術誌・紀要に原則DOIを付与するルールに変更
  - KURENAIでは現在約160誌（現在でも発行しているカレント誌）をホスト
- 学内発行学術誌・紀要は、JaLC DOIではなく、Crossref DOIを付与するルールに変更(2026.4より開始予定)
  - DOI付与はリンク解決だけでなく、世界中に書誌データを流通する役割も
  - 国際流通性の向上（各出版社やデータベース（OpenAlex等）にメタデータ（主に書誌情報）が採録されやすいだろう）という理由から
- 貴重資料デジタルアーカイブについても、書誌単位にJaLC DOIを付与することを計画中

3

コミュニティで力をあわせて！

JPCOARコミュニティの紹介と機関リポジトリのやること整理

＋αでご依頼いただいたもの（再）

【+αの主催者様からのご依頼内容】

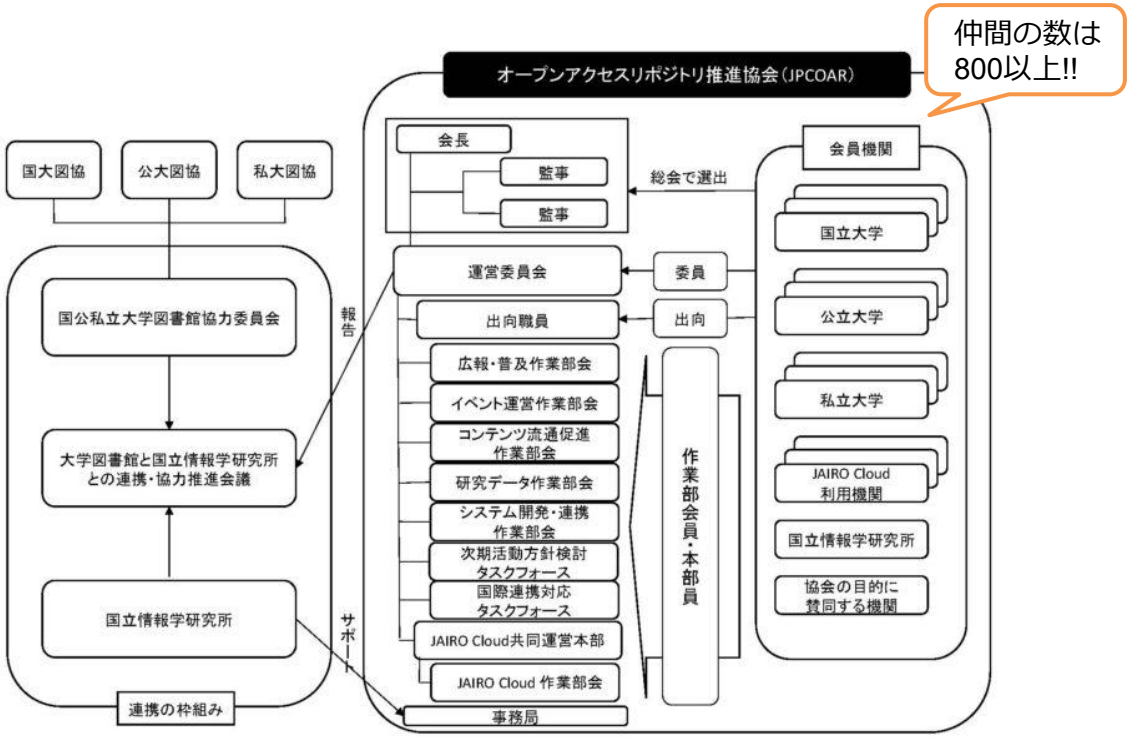
機関リポジトリでの登録・公開について、「何から手をつければよいか」と課題を感じている大学職員の方が多いかと存じます。つきましては、研究者を支えるお立場でのご経験に基づき、「具体的にどう進めればよいか」をお話しいただけますでしょうか。また、この中で JPCOAR にて実施されているコミュニティ醸成活動についても情報提供いただけますと幸いです。

「JPCOARコミュニティの紹介と機関リポジトリのやること整理」の前提として

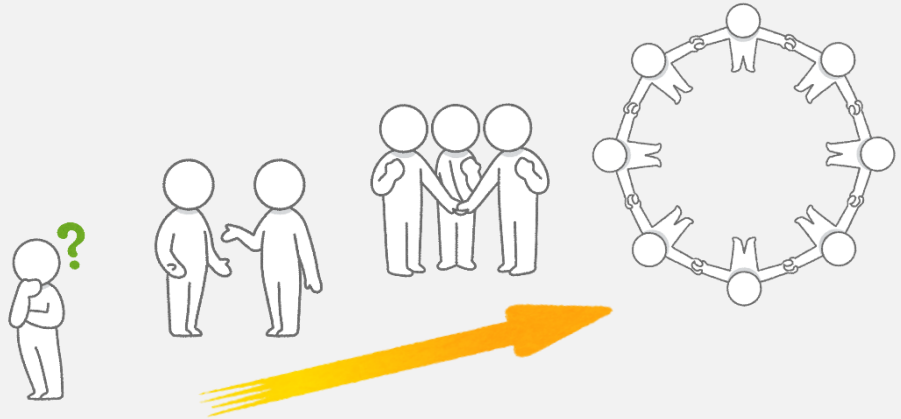
- オープン化は、世界中での地道な１件１件の積み上げが大事である。
- 大学・機関によっては、毎日発生する業務ではないにも関わらず、新しい業務でもあるし覚えることがたくさん。例えばエフォートとしては３％くらいなどの大学・機関もたくさんあると思います。（京都大学の事例を紹介しましたが、各大学・機関で目的が違うので。（京都大学基本理念「世界的に卓越した知の創造を行う」））
- 全世界での効率化検討も大事だけど、現時点ではそうもなっておらず、特に現状では大学や機関での現場同志の助け合いが重要だと思っています。
- 図書館は昔から横の繋がりは強いはず

JPCOARは会員機関同士が助け合えるコミュニティ

オープンアクセスリポジトリ推進協会（JPCOAR）は、機関リポジトリを運営する会員機関が相互に情報とノウハウを共有するためのコミュニティ



JPCOAR組織図　https://jpcoar.org/aboutjpcoar/organization/



会員機関は、教材や説明会を自機関のリポジトリの運営に役立てると同時に、他の機関へのアドバイスや事例の共有を通して、当事者としてコミュニティの運営に携わっています

「JPCOAR 地域ワークショップ資料」より

JPCOARウェブサイト

今年度７月に
リニューアルオープン

様々なコミュニケーションツールの提供や、研修・イベントのアーカイブ、業務に役立つ教材や情報などを、各作業部会で頑張って構築中

コミュニティへの参加

【2】交流 - JPCOAR Community Slack

https://jpcoar.org/support/communitytools/jpcoar-community-slack/

- JPCOAR会員機関、特に実務担当者間の情報共有・相互協力のためのツールです。
- 利用にはJPCOAR Webサイト（上記URL）から参加申請が必要です。
- 以下のようなチャンネルで情報交換・相談・お困りごとの投稿…ができます。

◎all-jpcoarcommunity
情報交換、質問、自慢、宣伝等、多様な目的でお使いください。

◎all-リポジトリ初心者相談室
どんな初心者的な質問をしても恥ずかしくない！ことを目的としたチャンネルです。
回答できる質問などが投稿されたら、ぜひみんなで助け合いましょう。

◎jairo_cloud
任意参加のチャンネルです。
JAIRO Cloudに関する情報共有のためのチャンネルです。

9

「JPCOAR 地域ワークショップ資料」より

コミュニティへの参加方法はさまざま

- 作業部会に入る（ハードル高い）
- メーリングリストで相談（ちょっとハードル高い？）
- Slackの初心者相談室で相談（気軽だけどまだハードルが？）
- Slackの投稿にアクションする（このあたりからでも！）
- 参加したイベントや研修、各種アンケートに答える（このあたりからでも！）

「Slackの投稿にアクションしてもらう」「アンケートに回答してもらう」だけでも立派な参加ですし、また作業部会等にも励みになりますし、運営の助けにもなります！

「機関リポジトリやること整理」

特に「国のオープンアクセス基本方針（※）」に着目して、
機関リポジトリのやることを整理してみます。

研究DX　内閣府

内閣府「研究ＤＸ（デジタル・トランスフォーメーション）－オープンサイエンス：学術論文等のオープンアクセス化の推進、公的資金による研究データの管理・利活用など－」（最低限見るとよいものを時系列順にした。）

- 公的資金による学術論文等のオープンアクセスの実現に向けた基本的な考え方（令和5年10月 総合科学技術・イノベーション会議 有識者議員）

↓

- （※）学術論文等の即時オープンアクセスの実現に向けた基本方針（令和6年2月 統合イノベーション戦略推進会議決定）

↓

- 学術論文等の即時オープンアクセスの実現に向けた基本方針の実施にあたっての具体的方策（令和6年10月 改正 関係府省申合せ）

（話者によるまとめ）

「国のOA基本方針」には何が書いてあるのか？

研究者に求められていることは、

- 研究成果である学術論文と根拠データを所属機関のリポジトリで公開し、誰もが自由に利活用可能となるように

大学図書館に求められていることは、

- 機関リポジトリの価値向上、成果発信力の強化
- 研究者の研究成果公開・発信のサポートを機関リポジトリを通じて行う

（話者による超簡略まとめ）

私たちが為すべきこと（まずは）

- 機関リポジトリの価値向上、成果発信力の強化
- 研究者の研究成果公開・発信のサポートを機関リポジトリを通じて行う

を実現するための研究者支援への最初のステップ（最低限の準備）は主に以下４点

⓪ 「国のOA基本方針」の理解

① 機関リポジトリの構築

② リポジトリの運用指針作成などの運用整備

リポジトリ運用準備

③ 雑誌発表論文の登録に関する知識

- 特に雑誌発表論文における著作権ポリシーの理解

④ メタデータ流通の知識

実務者の知識準備

（話者によるまとめ）

① 機関リポジトリの構築

- 様々なリポジトリ用のソフトウェアがある（例：京都大学はDSpaceというソフトウェア）
- 基本機能のみの運用でよければJAIRO Cloudがベストチョイスか

以下JPCOREウェブサイトより
「JAIRO Cloudを利用することにより、個々の機関は低コストで効率的に機関リポジトリを導入・運用することができます。また、JPCOAR内での情報共有により各機関の担当者の作業負担が軽減されるほか、JAIRO Cloudの機能改善等にも参画できます。」

②リポジトリの運用指針作成などの運用整備

【チェックポイント】

- 運用指針等で「学術雑誌論文」や「根拠データ」をリポジトリに登録できるルールになっているか？
- JAIRO Cloud（リポジトリシステム）で、「学術雑誌論文」や「根拠データ」が登録できるディレクトリなどが用意されているか？

【以下話者私見補足：ポリシーについて】

- OAポリシー、研究データ管理・公開ポリシーの策定必要有無は機関の考え次第でよいと思う。
- 機関としてのスタンスを内外に示す必要がある場合はあったほうがよいとも思うが、今回国のOA基本方針が定められ、論文やその根拠データについて国レベルで義務化された。これ以上の意味を各機関でどれくらい位置付けるかによるのではないか。
- 特に研究データは、多種多様であり、かつ研究インテグリティ、倫理等とも密接に関わるため、図書館だけでは管理も含めた全体は担当できない。図書館は、その役割である「知の再生産システム」部分（公開部分）に注力するのがよいのではないか。

③ 雑誌発表論文の登録に関する知識

基本的には登録必要性が出てきたときに慌てず対応できるよう手順を知っておけばよい。（詳細な知識は必要なし）

- 著作権ポリシーの調べ方をなんとなくでもよいので把握しておく。（実際には登録の必要が出てきたときに調べられればよい）
- メタデータ入力はやりながら慣れる程度でOK（図書の目録よりは単純ですし、ルールも緩やかです）
- 研究データ（おそらく現状まだ少ない）は、もし必要になった段階で「研究データ登録ガイドライン」を参考に

④ メタデータ流通の知識

これは思ったより？重要です

- 義務化要件を満たす意味でも、世界中の読者に研究者の成果を届けるためにも重要。（「知の再生産システム」のためにも）
- まずはIRDBにハーベストされる（＝CiNiiに採録される）ことのみ考えればよいと思います。
- ただし、最初の（JAIRO Cloud等のリポジトリの）設定だけきちんとできれば、日常的な手間は発生しない。
- 最初に頑張って設定しよう！

参考

②リポジトリの運用指針作成などの運用整備

- 京都大学学術情報リポジトリ運用指針
  ”本学において作成された次の各号に掲げる研究・教育成果物とする。”
  （細かく種別を記載（学術論文、学位論文、etc...））
- 群馬大学リポジトリ運用指針
  ”本学に関わる教育・研究成果物で，登録資格者が単独または他と共同で作成したもの，または本学においてその主要な部分が作成されたもの。”
  （大枠で定めている。このような方法でもOKかと）

③ 雑誌発表論文の登録に関する知識

- （まずは）著作権ポリシー調査
  - 「即時オープンアクセスに備える」シリーズセミナー その1 学術雑誌論文の権利確認方法って？①よくあるパターン講義編（会員機関限定）
- （必要がでてきたら）研究データの登録
  - 機関リポジトリへの研究データ登録ガイドライン

④ メタデータ流通の知識

- IRDBの概要と内部実装（第4回JPCOAR Webinar「IRDB-カラクリと役割：どこから・どこへ・どのように」）

私たちができること、役割（再）

① １件１件コツコツとオープンにする

② 流通にのせ世界中の人に届ける

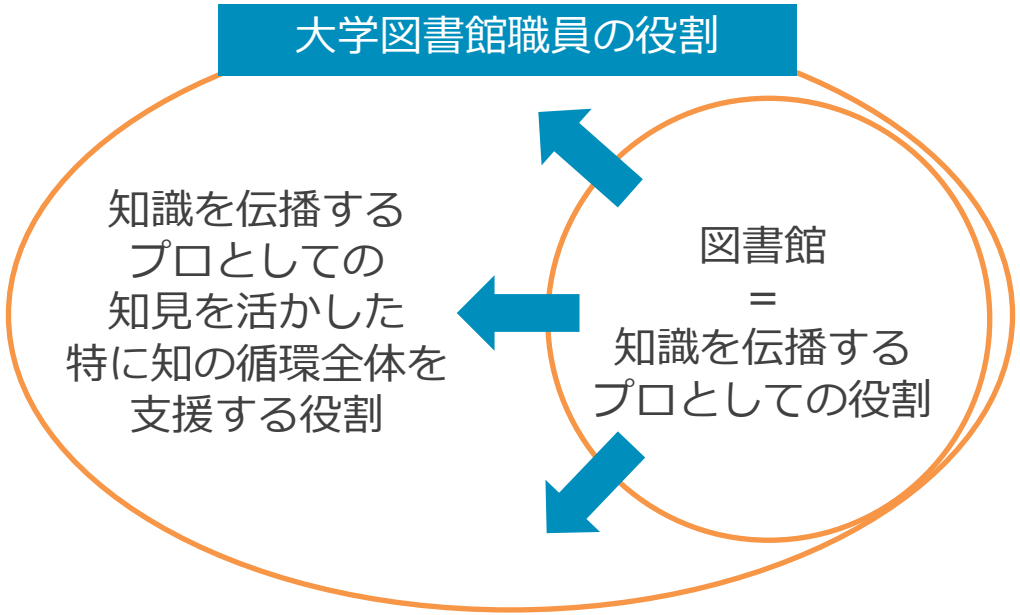
- オープン化することの意味自体は研究者コミュニティ自身が考えること。
- 私たちの仕事は、オープン化したい研究者に答えるための基盤を整えておくこと
- 実際に希望があった際には、１件オープンにするだけでも、世界に貢献することになる！

4

まとめ

個人的まとめ（2年前）（再）

科学を発展させるための
大学の様々な取り組み



特にRead（知の共有）だけでなく、Publish（知の創造）にも支援し、知識の循環全体に貢献する。
オープンサイエンスの時代（知は書き手から受け手に直接的に伝播される）にはこれまでの知見を活かし知の創造の支援をも行っていくことが必要なのではないか。

知識の循環を支援するプロとして、知識を伝播するプロをベースとしつつ、
もっと広い範囲で大学や科学の発展に貢献する。

話者「大学図書館をDXする（2023 第109回 全国図書館大会 岩手大会）」より

「知の循環システム」への貢献（再）

（これまで（も））知識を伝播する役割

私たちは世界中で協力して、１件１件目録を作成し、さらに利用者が使いやすいように棚に並べて、知りたい人が知りたいことにアクセスできるような環境を構築する仕事をしてきた。

（これから（も））知の循環全体を支援する役割

これからも同じで、オープンにしたい人がいたら、１件１件オープン化や研究成果発信の支援を行い、整理、流通させ、世界中の知りたい人が知りたいことにアクセスできるようにしていくことができる。
これは**私たちの最も得意**とすることであり、かつ**私たちにしかできないこと**ではないでしょうか。

機関リポジトリに対する図書館（職員）の役割　個人的まとめ

大学図書館は「知の再生産システム」に貢献してきた。デジタル化、オープン化により世界が変わろうと、「知の再生産システム」は必要である。
私たちは変わらずそれに貢献できるはずであり、過去の蓄積からも誰よりもそれができるはず。
私たちは戦争、貧困などの課題を解決するための基盤を構築し、世界を幸せにできる！

（さらに一図書館職員として話者個人的感想）
「知の再生産システム」の中で、どこまで貢献できるのかは正直自分でもよくわからない。
ただし、これまでずっと「知の再生産システム」において「知識を伝播」してきた大学図書館が、社会や科学の発展にその循環の中心を担って貢献しようとするその熱意は、それこそが大学図書館（職員）特有の誇るべき魂だと思っており、その気持ちが最も大切ではないかとも思っている。
大学図書館ができることは、まだたくさんあると思っており、全体のコミュニティとしても社会や科学の発展に貢献していきたい。